

自分の経験より英国の書物を参考にして書かれているのがかえって興味深く、プリムラのカウスリップとオックスリップの違いなどを覚えたものである。

その他では、ルーサー・バーバンクの書物、特に『トゲの無いサボテン』や彼の伝記に大変影響を受けた。現代の学生は農業専攻者でもバーバンクの名前を知らない人が多いのは残念だ。私はシャスタデージーの名付け親としてより、彼の生活自体にロマンがあるように思う。今でも、ハマギクや、庭にあるプラム‘サンタローザ’を見るたびにバーバンクを思い出さない日はない。私の長男がロスアンゼルス在住で、知り合いがバーバンク関係の著書のコレクターというので見せていただいたが、ほとんど古書である。最近ではアメリカですら、若い人はその名を知らないのだろうか。

この楽しい園芸生活も、父が再婚し、浅草蔵前の店が本格化して、私も蔵前に移転しなければならなくなって失われた。せっかく作った花壇も野菜畑も他人の手に渡った。父にとっては萩原商店復興のよい機会であったが、私にとってはエデンの園を追われたアダム的心境であった。何時か再び園芸に挑戦したいと、心の奥底から思っていた。園芸が好きだけでなく、家を出たいという願望もあった。

家業は景気がよく、使用人も20人ぐらいに増えた。それでも私は学校から帰ると仕事をさせられた。父は私を跡継ぎに決めていたので、大学へ行くのは反対であった。父に相談せず、自分の希望で千葉大を受けた。

大学時代は人生でいちばん楽しかった時代で、一般教養科目で経済学をとり、山岡教授のキリスト教研究会にも出席した。先生は神学の研究者でもあり、ドイツの神学者ブルトマンの紹介者でもあった。その頃、正式にキリスト教徒になった。

専門科目は愉しくて、友人にも恵まれた。3年の頃、父は私の将来を警戒し始めた。浅草蔵前では長男が大学へ行くと家を継がないで婿取りの例が多かったからである。父は「大学出にろくなものはおらん」というのが口癖であった。継母に弟ができたので家を出るのが賢明と考えたが、親戚の叔父などが会議を開き、強引に家業を継がされた。

この時代は営業や集金でおもしろくなく、3年後、牧師になる決心をして家を出た。宗教家になって、地方に行って、園芸の知識で地域に奉仕したいと考えていたのである。

この神学校は奨学金も出たし、アルバイトをすれば自立できる。この頃、大学の近くの三鷹のバラ園で働くことになり、再び園芸の生活をするようになった。神学大学は英語、ドイツ語など、語学はおもしろくなかったが、バラの手入れをしている時は天国であった。歴史、文学、哲学書を読むことも好きであったから、神学校の勉強も愉しかった。新約聖書のギリシャ語とヘブライ語に関する論文を書いて、大学院を出た。ギリシャ語は植物の学名の基礎になっているので、後に高山植物などの研究には便利であった。

当時、千葉大学時代の友人も遊びに来た。バラ園の主人は占領軍に家を貸していたので、彼らはアメリカからカタログを手に入れてくれたし、欲しいものを手に入れるのは簡単であった。アイリスはその頃珍しいものだらけで、花の咲くのが楽しみな毎日であった。花菖蒲を集めだしたのもその頃であった。

1968年春、小岩教会の牧師をしていた時、日本キリスト教団から内地留学のための奨学金が出た。当時の花卉園芸主任教授の小杉先生に相談すると、翌年から大学院になるので最後の年の花卉園芸専攻科を勧められた。いくつかの必修科目をとり、論文を書いた。論文の内容は、高山植物の園芸化と、自然保護に関するものであった。高山植物をタネから育てて販売すれば、趣味家が山から植物を採らなくなるという持論ももっていたし、かなりの産業になるという自信があった。小杉教授の評は、「君の論文は少しも経済性がない」ということであったが、今から考えると隔世の感がある。

私の理念と実際

千葉大に入ってから牧師になるまでの12年間は、社会生活の3年間も含めて、勉強の分量も、生活の厳しさも、経験豊富な時代であった。

江戸川区小岩で牧師に就任した当時、個人として、高山植物の栽培や研究を行った。三鷹の矢野ガーデンには臨時で仕事をしてしたが、三鷹も小岩も、近くに山草や高山植物の愛好家が多く、かなりのベテランがいたので、大変勉強になった。『ガーデンライフ』が発行されたのがその頃。編集長の植村さんから、高山植物に関する記事を書いてくれと頼まれたことがある。神学大学の論文のスタイルを真似て、まず高山植物に関する外国の文献を読んだ。

一方、宗教家として、このような珍種を生産して高

い値で売ることが思想に反することであったが、生活の手段としてはやむを得ないことであった。また、東京は夏の気温が高く、高山植物や山草の栽培にとって立地条件がよいといえず、かなりのものを枯らすことになった。当時英国山草会に入会して、会報が貴重な研究資料になったが、大半のものは栽培不可能とあきらめていた。

そんな生活を7年送った後、知り合いの牧師が、那須高原の福島県側にある僻地に日本キリスト教団の伝道所があり、定住の牧師を求めているという話をもってきた。確かに7～8月の気温は東京より6～7℃低く、標高も500m以上の高原である。都会生活が長い私がそんなところで長く住めるわけがないと反対する友人もいた。だが妻の時子が反対しなかったのは驚きであった。熊が時々出るし、学校は小学校から中学校まで120名ぐらいの僻地校である。私の趣味や理念のために3人の幼児の教育的環境や前途が犠牲になると考えると、いささか罪悪感があった。父や親戚は、何か悪いことをして左遷されたと考えていた。

家財道具と同じ量があった高山植物の苗は、中雄君と河合君がトラックに乗せて運んでくれた。二人は現在でも私の近くに住んで、山草の栽培をしている。40年ぐらい前の、1969年8月下旬のことである。身分は牧師であったが、生活は川谷保育所の所長ということで、十分ではなかったが、定収入があることはありがたかった。

西郷（にしごう）村は標高400～1800mほどの那須山麓に展開する高原で、私の住居の近くはほとんどが酪農。種パレイシヨや漬物用大根を栽培している農家が多く、大半は中国北部からの引き揚げ者であった。

1970年春、川谷（かわたに）高山植物振興会という組織を作り、まず花卉園芸、山草類の栽培について講演、次にタネまき等の実際を行った。次に西郷村に補助金を申請し、共同の温室を建て、シャクナゲのタネまきを行った。会員は約50名集まり、各自2箱の播種床を作り、夏まで、私と役員が管理することにした。タネはほとんど発芽したが、各自の管理に任せてからは、残念ながら成功率は少なかった。このシャクナゲはアカズラ山のシャクナゲで矮性濃紅色で園芸価値の高いものであったから、成功した人は業者の下請けになった。合わせてエゾムラサキツツジの実生も行った。

その間、私は東京より持参した山草類の繁殖に努め、



花葉会賞受賞記念講演をする萩原純一氏

月1回の東京山草会で販売した。1970年春には英国から珍しい山草のタネを入手して大量にまき、日本で普及する端緒となった。一時は3000種ぐらいの洋種山草を持っていた。

私たちは目的を持ってこの山村に移転してきたので、東京の知り合いの中には高山植物を利用して地元の産業になるものを勧めてくださる方もいた。その1つがレジニアクセサリーで、高山植物の小さな花をプラスチックの中に封入して指輪やペンダントなどを作るものである。20人ぐらいの女性が家庭で作業し、妻時子が中心になって販売する方法をとった。1970～1980年がもっとも盛んな時代で、植物の開発の助けにもなった。この頃1キロ離れたところに個人で土地を取得、販売のための有限会社萩原高山植物研究所を設立した。

中雄、河合の両名が東京の花矢から独立して、株式会社白河花矢を設立したのもこの頃である。この会社はナーセリーというより大量生産のプラントサプライヤーで、英国などで見られる高山植物の種苗店より規模の大きなものとなった。山から採らずバイオで生産しているのは時代の要求に応えたためだと思っている。

その後、神奈川県片瀬の教会から招待があり、私たちは片瀬教会の牧師として移転した。これは私たちの身分、職業があくまでも宗教家であって、利益追求の実業家でないからやむを得ないことであった。東京浅草の商人の家に育ち、どうすれば経済的な利益が上がるかということは骨の髄まで浸み込んでいたが、人間にとって一番大切なものは何かということを問う牧師の生活を選んだのである。そのため、自然を破壊したり、人を蹴落としても儲けるようなやり方には反対であった。私たちの地域はサギソウやウチョウランの自生地であったが、現在は完全に消滅し、その後の自然破壊は取り返しのつかないものになってしまった。

私たちは湘南の生活も体験したが、山の見える生活が恋しく、2004年に自宅のある西郷村に帰り、現在は果樹類を栽培して、老後の生活をしている。